

ドイツ文筆家保護連盟 (Schutzverband Deutscher Schriftsteller : SDS) 活動史 (1909-1933)

— 世紀転換期からワイマール共和国期にかけての文学活動 —

学位論文内容の要旨

本論文は、五部から構成されている。内容は、「ドイツ文筆家保護連盟」(Schutzverband Deutscher Schriftsteller: 以下 略称 SDS と明記)の設立から解体までの組織変遷を通史的にたどり、近代以降のドイツ文筆業をめぐる諸問題を、世紀転換期からワイマール共和国期における全般的な社会変動との関連をふまえながら論述したものである。

まず「序論」では、本研究の理論的枠組みについて考察されている。ドイツ文学の研究史上、ひとつのパラダイム転換ともなった伝統的テキスト解釈(「生産美学」)からヤウスの「受容美学」へいたる過程を批判的に検証し、その後に展開された文学の社会史的アプローチの系譜に本研究を位置づける視座と、そのモデルケースとして SDS の活動状況を取り上げる意義を論じている。

第一部では、SDS の草創期が取り扱われている。1909年に SDS 設立の契機となったミュンヘンの地方紙『アルゲマイネ・ツァイトウング』上で繰り広げられた「文筆家の価値をめぐる議論」から、ベルリンのカフェでの文筆家の会合を経て SDS が誕生する経緯が描かれている。また、SDS が設立された時代背景に注目し、当時の文筆家を取り巻く社会状況、特に出版業が近代的な文化産業として発展していく過程を詳述している。第一部の後半部では、SDS の設立にあたってまず問題となった連盟の「綱領」に関する論争を取り上げ、1911年に刊行された連盟綱領パンフレット『商品としての文学』の内容を分析している。

第二部では、1911年から第一次世界大戦直前にいたる SDS の初期実践活動が考察の対象となっている。出版社・編集者に対する文筆家の権利保護運動、すなわち、著作物に対する報酬額の改善、著作権法の改正、記事の無断転用に対する抗議、あるいは文学作品の検閲問題などについて、主に連盟機関紙に掲載された報告記録を分析しながら、この期間における SDS の主要な課題とその活動実態を明らかにした。さらに、連盟組織の会員条件に関わる問題が取り上げられ、SDS に加入するための「基本条項」が変更された点についても言及されている。組織の拡大のため、設立当初に掲げられた「職業文筆家」から「雑誌編集者」、「出版人」といった職種の人々にもその門戸が開放されたこと、逆に「ディレ

「タレントの排除」を入会審査で明確化していく方針が打ち出されたこと、会員の文学的潮流・政治的イデオロギーの問題は不問に付されること、などの諸点が指摘され、SDSが「超党派的」性格をもった組織であることが確認される。また、地方支部の設立により組織構造が大きな変化を遂げつつあったことが述べられている。

第三部は、SDSの第一次世界大戦中における活動状況の分析を主なテーマとしている。本連盟が戦争中に刊行した『ドイツ兵士の本』と『SDSの戦争ファイル』という二冊の小冊子を取り上げ、ナショナリズムの高揚した時代状況下でSDSが本来の文筆業の利益代表機関から戦争プロパガンダ機関へと変貌していく様子と、その後、戦争の熱狂から醒め、再び文筆業の保護機関としての機能を取り戻していく過程を記述している。さらに、SDSとその他の文筆家団体との関係にも論及し、競合と対立の関係、あるいは業務提携をねらった「カルテル」結成の交渉問題を分析している。

第四部では、ドイツ革命（1918年）後のレーテ運動の盛衰、労働組合運動の発展といった、当時の社会状況の劇的変化の中で、SDSが1920年に文筆家団体史上初となる「労働組合」への転換を果たし、組織として大きな変革期を迎えた過程が明らかにされている。労働組合SDSの誕生は、設立以来、さまざまな論争を繰り返しながらその可能性を模索し続けてきた一連の試みの「集大成」であり、「文筆家の社会的向上と経済的苦境の改善」のため、結成から十年の期間を経て出した最終的な解決策であったことが指摘されている。

第五部では、ワイマール共和国期にSDSが展開した活動について取り扱われている。未曾有の経済不況下における文筆家の苦境を打開するためにSDSが展開した組織活動を、1. 文筆家の「国家による経済・社会的保護」、2. 「最低賃金の確立を目指す労働組合としての組織活動」、3. 「新しいメディアによる文化の大衆化に順応しようとする試み」、4. 「検閲法制定に対する抗議運動」、という四点に絞って論じている。その際、文筆業の新たな「販路」として出現したラジオ、映画への取り組み、一種の検閲法である「有害出版物取締法」成立に対する抗議運動、さらには、メディア産業との報酬・著作権をめぐる協議、国家による文化支援の要求、といったワイマール共和国期におけるSDSの組織活動は、現代の多様な社会的要因の中で営まれる文筆業の「原型」であったことが指摘されている。

最後に「結論」として本研究の論述が概括される。SDSがその成立から解体にいたる過程で取り組んだ諸課題は、文筆家のアイデンティティと社会的地位の確立、文学作品のもつ「商業性」と「芸術性」の二面性、「美的価値」と「市場価値」の相克、著作権や検閲の問題、時代や社会の支配的文化傾向に対抗するサブカルチャーと高尚な文化の対立関係といった、非常に多岐にわたるものであり、こうしたSDSの活動史は、その後の文筆家団体に大きな影響を与えて、現代の文筆業が抱える複雑な問題に対しても一つの「モデル」を提示するものであること主張されている。そして、そこに本研究のもつアクチュアルな意義があると結論付けられている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 山 田 貞 三

副 査 教 授 長 尾 輝 彦

副 査 教 授 清 水 誠

学 位 論 文 題 名

ドイツ文筆家保護連盟 (Schutzverband Deutscher Schriftsteller : SDS) 活動史 (1909-1933)

— 世紀転換期からワイマール共和国期にかけての文学活動 —

審査委員会は、本論文が提出されて以後、6回にわたって委員会を開催し、申請論文を慎重に精読して審査するとともに、口述試問を実施し、十分に審議を重ねて適切な評価に努めた。その結果、本論文に対する以下の記述のような評価に鑑み、審査委員全員が一致して、真貝恒平氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当である、との結論に達し、文学研究科教授会に報告した。教授会は、この報告に基づき審議を重ね、これを承認したものである。

本論文は、20世紀初頭のドイツに成立した文筆家の職業団体「ドイツ文筆家保護連盟」(SDS)の活動史を通時的にたどり、出版・印刷業が近代的な文化産業として確立していく中で顕在化した当時の文筆業をめぐる諸問題を社会文化史的な観点から考察したものである。

本連盟の綱領ともいえるパンフレット『商品としての文学』、機関誌『文筆家』に掲載された活動報告、第一次世界大戦中に本連盟によって刊行された『ドイツ兵士の本』および『SDSの戦争ファイル』が中心的に取り上げられ、世紀転換期からワイマール共和国期にいたる政治・経済・社会情勢の変動を視野に入れながら、その実証的な分析・記述がなされている。「文学の商業性」、「職業としての文筆業」、「労働組合の結成」、「著作権」、「検閲」、「ナショナリズム」といったテーマが主要な考察対象となっており、本論文は、従来の文学研究では等閑視されてきたこのような文筆活動の隠れた局面を明らかにしようとするものである。

本論文の成果は、従来の作家・作品論を中心とした個別研究あるいは文学史記述ではまったく取り上げられてこなかった作家の職業団体としての動態に着目し、文学活動を〈経済的な営為としての文筆業〉という視座から捉えた点にある。単にひとつの文筆家団体の活動史を実証的に再構成しただけではなく、その成立から解体にいたる過程において顕在

化した、文学作品のもつ「商業性」と「芸術性」をめぐる論争、文筆家のアイデンティティと社会的なステータスの問題、出版産業・市場との関係、著作契約と報酬、そして「著作権」や公権力による「検閲」の問題等、これら文筆活動に伴う根本的なテーマを一次資料の分析に基づいて具体的に論述した点は高く評価された。

また、本論文の考察対象となった「ドイツ文筆家保護連盟」は 20 世紀初頭に成立し、ナチスの政権掌握とともに解体された文筆家団体であるが、この連盟の足跡は、戦後のドイツにおける文筆家の組織的な活動にも影響を及ぼしており、そこに本研究成果の現代的な意義を認めることができる。

本論文には、記述があまりにも詳細にわたっているために論旨が不明確となっている箇所や重複部分も散見される。また、原文（ドイツ語）の日本語訳にまだ生硬さが多く見られるなどの問題点も指摘された。しかしこれらの諸点は今後の課題として容易に解決されるものと判断できる。

なお、真貝恒平氏は、現在、日本学術振興会の特別研究員であり、学位取得の後も引き続き同特別研究員 - PDとして研究に専念する予定である。